

青年期の恋愛依存に関する研究

専攻 人間発達教育専攻
コース 教育コミュニケーションコース
学籍番号 M21002D
氏名 謝永喆

問題と目的

青年期の恋愛依存は、恋人に依存している状態を表している。適切な恋愛依存をしている人は、恋人から心理的に支えられ、恋人に依存している以外にも、友人、親などの対象にも依存している。恋人との良好な相互依存を通して安定に成長していく。しかし、適切な恋愛依存ができない若者もたくさん存在する。その者たちは恋人にだけ依存し、恋人との関係の中に不安を強く感じている。青年期の恋愛は、もともと恋人に対して「閉じられた」関係を望む傾向がある。そのため、過度に恋人に集中したり、自分のすべてを恋人にゆだねてしまうと、恋愛依存症やデートDVのような関係に落ちる可能性が高い。更にこのような関係は「閉じられた」ため、発見することが難しく、それを援助しようとしても拒絶されることが多い。ではこのようなネガティブな恋愛依存の関係に過度に陥ることを防ぐためにどうすればいいのか。

更に先行研究では、恋愛依存の性質について特徴から検討する研究が多く、他の側面との関係においていかなる意味をもつのかという視点から検討した研究はほとんどなかった

そこで、本研究では、アイデンティティおよび親密性を用いて、恋愛依存の性質を見極めたうえで、困ったときに、ポジティブな恋愛依存およびネガティブな恋愛依存をしている人はそれぞれどのような援助要請をしているかを検討

することを目的とする。それを通じて、恋愛依存の本質をより明白にし、ネガティブな恋愛依存にならないために教育者側ができることを検討する。

調査対象

インターネット調査を用いて調査を行い、18歳から23歳、未婚、恋人がいる大学生、短期大学生、各種専門学校生の学生230名を調査対象にした。

調査時期

2022年11月25日～2022年12月1日

調査内容

- ①恋愛依存尺度：伊福・徳田（2006）の恋愛依存傾向尺度（19項目、5件法）で測定した。因子分析を行い、「中心・孤独不安」、「心理的支え」、「愛情・独占欲求」の下位尺度を得た。
- ②アイデンティティ：谷（2001）MEIS尺度（20項目、7件法）で測定した。
- ③親密性：谷・原田（2011）親密性尺度（10項目、7件法）で測定した。
- ④援助要請：永井（2013）の援助要請スタイル尺度（12項目、7件法）の対象をそれぞれ恋人、友達、親などの大人に限定して測定した。因子分析を行い、原尺度と同じ因子を得た。

結果と考察

(1) 恋愛依存尺度の性質

「中心・孤独不安」は恋人過度に生活の中心にし、恋人から離れると不安を感じてしまうよ

うな恋人に対する過剰に依存のことを反映している。更に MEIS の下位尺度と負の相関がみられているため、ネガティブな恋愛依存の側面としてみることができよう。

「心理的支え」は恋人の存在が自分に与える心理的支えを反映している。更に親密性尺度と正の相関がみられたため、ポジティブな恋愛依存の側面としてみる事ができよう。

「愛情・独占欲求」は恋人に対する愛情および独占の欲求を反映している。更に MEIS の下位尺度と弱い相関がみられたため、ある程度ネガティブな恋愛依存の側面としてみる事ができよう。

(2) 恋愛依存タイプ

適切依存タイプ: 「中心・孤独不安」得点が低く、「心理的支え」得点が高く、「愛情・独占欲求」得点が中程度であった。恋人に支えられ、しかも恋人に過度に集中することがなく、不安をあまり感じない特徴を持っており、更にアイデンティティと親密性の発達が一番進んでいるため、ポジティブな恋愛依存をしていると言えるだろう。

非依存タイプ: 3つの得点が全部低い。恋人に依存していないため、親密性が発達していないが、ある程度人格発達が進んでいることが言えるだろう

過剰依存タイプ: 「中心・孤独不安」および「愛情・独占欲求」得点が高いが、「心理的支え」も高い。恋人に過度に集中し、恋人との関係に不安を強く感じ、恋人を独占し、恋人に対する愛情欲求が強く、更にアイデンティティの発達が一番進んでいないことから、ネガティブな恋愛依存の一例といえるだろう。

(3) 適切依存タイプと過剰依存タイプにおける援助要請の違い

適切依存タイプの人においては、どの対象に対しても、援助要請過剰得点と援助要請自立得点は援助要請回避得点より有意に高かった。

過剰依存の人においては、恋人に対してのみ、援助要請過剰得点および援助要請自立得点は援助要請回避得点より有意に高かった。友達に対して、援助要請自立得点は援助要請回避得点より有意に高かった。親に対しても、援助要請自立得点のみが、援助要請回避得点より有意に高かった。友達と親に対して、援助要請過剰得点と援助要請回避得点の間に有意差が出なかった。

つまり、困難があったとき、適切依存タイプの人にはどの人に対しても、援助を求めながら自立で解決したり、すべてを他人任せたり、援助を求めること自体を断らない。しかし一方、過剰依存タイプの人には、恋人に対しては、適切依存タイプと変わらない援助要請の形をとっているが、友達や親に対しては、すべてを他人に任せたりするような援助に関しては適切依存タイプほど求めておらず、適切依存タイプとは違う依存の形をとっていることが明らかになった。

更に、各援助要請得点の恋愛依存タイプ間の差を見ると、大人への援助要請回避得点について、過剰依存タイプは適切依存タイプより有意に得点が高かった。つまり、過剰依存タイプの人には、困ったことがあったときに、適切依存タイプの人より、親に相談することを回避していることが明らかにされた。

以上のことを踏まえて、行動レベルでも、ネガティブな恋愛依存は恋人にだけ依存するが、ポジティブな恋愛依存は恋人のみならず、他の人にも依存するということが確認された。

主任指導教員 中間玲子
指導教員 中間玲子